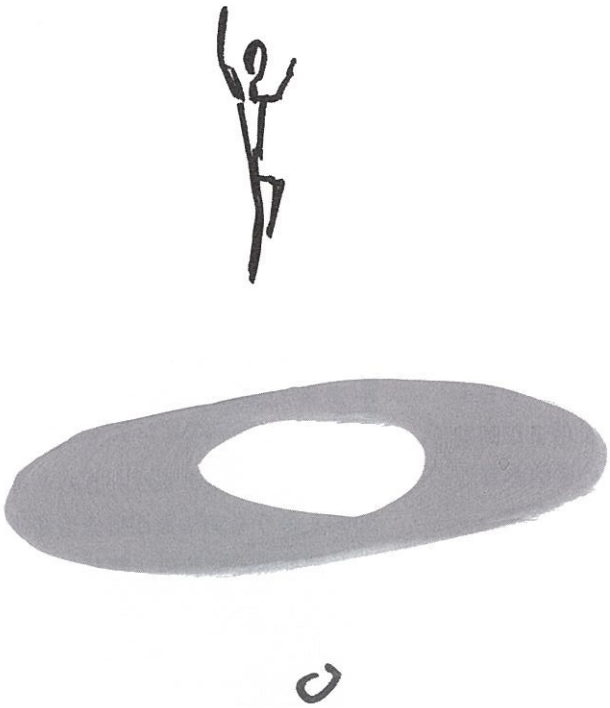
西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

［特集論文―Ⅰ］

西口敏宏 一橋大学イノベーション研究センター教授
Nishiguchi Toshihiro



松本あすかという作品
ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴

An Opus Called Asuka Matsumoto:
Her Pilgrimage as an Artist in the Light of Network Theory

成功する人や組織は、遠距離交際と近所づきあいの、絶妙なバランスを保ちながら活動している。
濃密な近所づきあいを維持しながら、他方では、触手をはるか遠くへ伸ばし、
遠距離のノード（結節点）とも、短い経路でつながっている。
そして、そこで得られた冗長性のない情報を、巧みに利用している。
対照的に、失敗し続ける人や組織は、どこかでネットワークのバランスを崩している。
本稿では、クラシック音楽に新たな響きと感動を呼び起こさせるピアニスト・松本あすかの、
成功と失敗の入り交じった、波乱に富んだ半生を、３つの時期の人的ネットワーク図をもとに読み解く。
一貫して一個人の視点からなされる人的ネットワークの定性分析は、人生選択術のヒントを与えよう。

Copyright©2009 Nishiguchi

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

1 アドリブがわからない

「じゃ次は、このブルースコードで、アドリブを弾いてみましょう」

松本あすか（敬称略、以下同じ）、18歳の春、入学した渋谷の音楽専門学校の初日。先生の言葉に身体が凍りつく。ただ固まっていると、アドバイスが飛ぶ。

「自分の好きなように弾けばいいのよ」

自由に好きに弾くだって？　意味がわからない。３歳からクラシック音楽一辺倒だった彼女が、初めて味わう傲慢な屈辱感。楽譜にない音を弾くなんて、ありえない！

これが松本あすかの「遠距離交際」のはじまりだった。

高３の冬、家出した。それまでの「恵まれた環境」への反逆。幼少期からお仕着せを受け入れてきた自分自身への謀反。もうピアノなんてやめてやる。みずからの存在の根源を問う出奔。だが、無意識に詰めたリュックのなかには、楽譜が入っていた。

ピアニスト、松本あすかは、輝かしい経歴を誇る（写真１）。

３歳からクラシックピアノの英才教育を受け、６歳でピティナ（PTNA）・ヤングピアノコンペティション全国大会Ａ１級金賞受賞（つまり、同級１位優勝）。７歳でイタリアのプレミオ・モーツァルト国際器楽コンクールで最年少３位入賞。その後、思春期にかけて、欧州や韓国など、海外の演奏旅行にもよく出かけた。食事と勉強以外、ピアノ漬けの日々。華々しい経歴の裏には、過酷な練習と、学友からかけ離れた毎日があった。

あすかが、まわりとのギャップに深刻に悩みはじめた

写真１　松本あすか

高校時代。17歳で第21回ピティナ・ピアノコンペティション・コンチェルト部門全国大会上級最優秀賞受賞（つまり、同級１位優勝）。だが、ピアノで評価を受けても、通学していた普通高校の友だちの話題についていけない。加えて、思春期特有の憂鬱と、変化する自分をとらえきれない焦燥感に悩む。そうしたなか、ピアノ街道を歩む自分を真剣に疑いはじめる。

はたして、これは自分で選んだ道だったのか。もっと他の生き方はなかったろうか。この先の一歩を、心の底から望んで、自己責任で選ぶ確信が欲しかった。

高３の１月、家出から２週間後、八王子の実家に戻った。卒業直前に自動車の運転免許をとった。クラシックピアノはやめる。音大にも行かない。誰が何といおうと、これからは自分の人生はみずから決めたい。

自身の手記は語る。

「誰のせいにもせず、自分の責任で、ほんとうに自分が望んだ道しか歩まない、と決めた。自分が望んだ音しか出さない、と決めた。そして、後悔したくないし、文句もいいたくないので、『やりたい！』と心から感じたものは、可能な限り、かたっぱしから自分に

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

経験させ、実現させてあげようと決めた」

自問自答のすえ、みずから選択したのは、ジャズ、ポップスなど広い音楽ジャンルを学ぶことのできる渋谷の大手専門学校だった。譜面通りに弾くクラシックと違い、音符がほとんどないジャズやポップスの演奏。音符なしで弾くことに罪悪感さえ覚える彼女にとって、真逆の世界だった。

あてどのない「自由」を学習する日々がはじまった。今まで経験したことのない、自己責任で生き抜く自主選択の場でもあった。新たな遠距離交際の毎日は、音楽仲間とのふとした会話や協演関係から、次々に未知のコミュニティーにつながっていった。

パンクロック、J-ポップ、ジャズ。それまで自己検閲によって罪悪感なしには聴けなかった音楽ジャンルとの格闘の日々。何ごとにも前向きに積極的に取り組むあすかは、入学1年目、通学する専門学校でベスト演奏家賞をとった。

多くのバンド仲間、とその友人たち、とそのまた知人グループといった具合に、交流の輪が急速に広がる。彼らとセッションし、路上ライブもやった。高3まで、たった1人で家にこもってピアノを弾いていた頃とは別世界だった。あのままずっとクラシック音楽を続けていたら、決して遭遇しなかったであろう世界。ミュージシャンだけでなく、写真家や画家、ダンサーやデザイナーらとも知り合い、コラボをはじめた。めくるめく毎日だった。

高3のとき、小さな個人ブランドを立ち上げ、自分でデザインした装身具、絵はがき、編み物ケータイ入れなどを、原宿のフリーマーケットや渋谷の路上、また、ネットで販売したことがあった。専門学校入学後は、新たに生活費と学費稼ぎのため、宅配便、コンビニ店員から弁当づくりまで、無数のアルバイトも経験した。

すべてが初体験だった。誘われ、あるいは、才能を見込まれて、作詞、作曲、編曲、スタジオ録音やライブ出演、さらに、写真のモデルもはじめた。数年後には、腕前を買われて、親密な音楽仲間とマイナーレーベルからCDデビューも果たした。

こうした体験を通して大切なことを学んだ。それは、かつてクラシック音楽界で無自覚のうちに経験していたギチギチの「近所づきあい」の弊害と、現在の「遠距離交際」がもたらす解放感と自由だった。

だが、他方では、こんなことをいつまで続けられるのかという不安と、それが何であろうと、自分が真に求め

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

ているものにはやはり到達できないのではないかという焦燥感もあった。そういった一切合財が、複雑に絡み合って折り重なり、混沌とした思いとなって、心にのしかかった。

幼少期からあれほど慣れ親しんだクラシック音楽界。今、外から眺めてみると、それは世界中のあらゆる音楽のほんのひと握りでしかなく、狭い社会で、それとは知らずにギチギチの「近所づきあい」にがんじがらめになっていた自分に気づく。あの特殊な環境のなかで、１人もがき苦しみ、たった１つの価値観のもとで、皆の期待に応え、成功しなければならないという強迫観念にとりつかれ、何か大切なものを見失っていたことも思い出された。

だが、今、他人との「違い」を知り、自分の立ち位置を冷静に判断できる段階に達した。人は何に対して価値を見出すのか、正解は１つではなく、その人の立場や見方によって変化することもわかってきた。異なる環境でもみくちゃにされながら、おぼろげながらも、何か重要なことをつかみはじめているのではないかという実感も湧く。

そんなある日、あすかはこう手記に記した。

「ホットケーキになったって、親子丼になったって、たまごは消えてなくなったりなんかしない。むしろ、生きるんだ。社会から求められ、自分が望むままに」

2 故郷へ

そして、５年間の「放浪」は終わる。23歳のとき、あすかはあるきっかけで、再びクラシックの世界に戻った。

それまでに、ポップスの世界で生き残ることを真剣に考えた時期もあった。もはや音符のない世界への畏怖はなくなり、むしろ、ライブならではの演奏の楽しさや、その場のノリを大事にする、いわゆる「ライブ感」というものを楽しんでいる自分がいた。

だが、何か心の奥底で、違う、これだけじゃない、自分が何を望み、何をやりたいのか、真に実感できることは、これだけではないのではないか、とささやく声があった。そして、そのときは訪れた。

あすかはある１人の女性に電話をした。３歳から18歳までピアノを師事し、第２の母ともいうべきA先生だった。小さい頃からいつも彼女のピアノを、そして、彼女自身を見守っていてくれており、なにげない相談も気楽にできる存在であったが、この５年間はまったくといっていいほど連絡をとっていなかった。

「あら、あすかちゃん、待ってたのよ。あなた、カプースチンっていうロシアの天才ピアニストのこと、知ってる？　作曲家としても有名で、ジャズの要素を取り入れた難曲で知られる人なんだけど、まさに、あすかちゃん、あなたのために書かれたような曲があるのよ。ちょうどコンクールもあることだし、あすかちゃんだったら、この人の曲できっと優勝できるわよ」

長年の無沙汰を詫び、また、この期におよんで、もう１度クラシック音楽界に戻りたいなどということ自体、突拍子もない発想であり、どうやって話を切り出そうかとビクビクしていたあすかは、先生の開口一番のこの言葉に出鼻をくじかれた。この５年間、あすかが自称「あんぽんたん」をしていたことがまるで嘘だったかのような、そして、この電話が来ることを予期していたかのような、先生の口調だった。

それから一連の会話が続き、親密な者どうしの「諒解」があり、あすかの「出戻り」が決まった。

初めてカプースチンの楽譜を見た瞬間、あすかは「恋」に落ちた。これだ！　この曲だ！　今、この時点で、この曲と出逢うためにこそ、これまでの私の人生があり、苦悩があり、涙と逡巡があり、別れと邂逅があ

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

り、慟哭と回帰があったに違いなかった。

それはとてつもない難曲だった。ほとんど各小節ごとに左右の手のリズムが変わり、頻繁に転調があり、幼少期からクラシックピアノで鍛え抜かれた腕でも、最初はかろうじてついていけるかどうかといった超絶技巧のオンパレードだった。

しかも、ジャズ理論を学び、体得した者でなければ扱いにくいジャズ独特のフレーズや「語法」に満ちていた。そして、楽譜の行間には、ジャズ独特のグルーヴ感なしには、この曲の効果的な演奏は不可能なこと、かりに1つ1つの音符すべてを行儀よく正確に弾き終えたとしても、それだけでは決して聴衆は感動しないだろうし、心からの拍手を送ってもらえそうもないことも読み取れた。

なかでもあすかを驚かせたのは、この5年間、路上やライブハウスで慣れ親しんだ「アドリブ」、専門学校の入学初日から、この受賞歴に満ちたクラシックピアノ少女を悩ませ、非常な努力のすえ、ようやく身につけたあの「楽譜にない」はずの即興の世界が、なんとカプースチンの楽譜には、1つ1つ克明に書き込まれていたことだった。

これは、できるけど、できない。つまり、訓練を積んだクラシックピアノ教師なら、楽譜に書かれている以上、いちおう物理的に再現することはできるかもしれないが、「音楽」として、ジャズ独特のノリやグルーヴ感をもつあの情動を刺激する得体の知れないものを引き出して演奏し、聴衆の魂を揺り動かすことは難しいだろう。

今、自分には、5年間の「遠距離交際」を経て、そこでの慟哭と涙と身を切るような痛みを伴う体験を通して、身体全体で覚えたあの感覚が根づいている。18歳までのピアノ教室と自宅での慣れ親しんだ練習だけからは決して修得できなかったであろう、あの身体の奥底から溢れ出てくる「裏打ち」のビート感。渋谷や新宿や吉祥寺の路上で、携帯型の吹奏鍵盤楽器1本で、深夜すぎまで去らぬ客を前に、彼らと対話し、感動させ、ときにみずからも号泣しながら、深い交流の一瞬を味わうことができた、あの部厚い現実体験。

そうした人生経験の重みと、幼少期から鍛え抜かれた超絶技巧と、情動のほとばしりと、めくるめく閃き。そういった一切合財の記憶が、今、手に握りしめたカプースチンの楽譜を目で追いながらよみがえり、涙が頬を伝って、譜面を濡らした。

もう躊躇する理由は何もなかった。あすかは、楽譜とともに自宅のピアノ練習室に引きこもり、むさぼるように練習を開始した。

一見、そこには昔と同じ「おたまじゃくしの楽譜」が待っていた。だが、そこから見える景色、脳内を飛翔する音楽のビジョン、自然につむぎ出される自分の楽音。そうしたすべては、明らかに18歳のときとは違っていた。

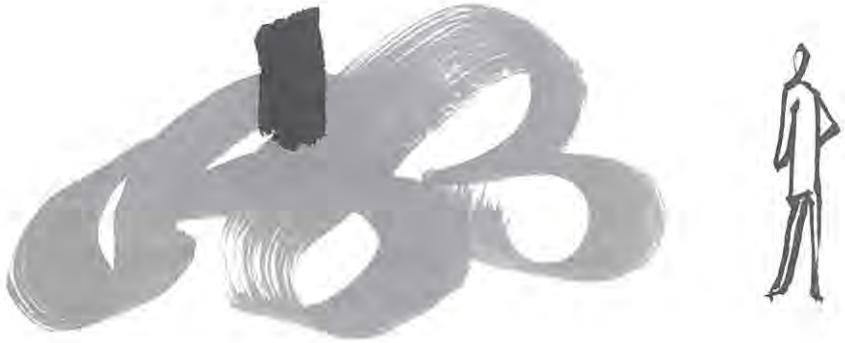
譜面通りに弾くことは受動であり、アドリブ演奏は能動。昔、そう思い込んでいた2つのかけ離れた感覚が、今では自然に結びつく。譜面のなかの自由と、自由のなかにある心地よい音楽への絶対服従。そうした別々の2つの感覚が、カプースチンの楽曲を通して今、渾然一体となって、彼女を包み込む。

かつてバラバラに思われた自由と服従の感覚、そして、そこから生じていた違和感。だが今、それぞれを同時に感じながら、自然に、自由に織り合わせることができる喜びに、心が躍った。

3 メジャーデビュー

これはいける。すごいぞ。今、私は自分にしかできないことをやっている。みずからの解釈で楽譜を読み取り、みずからの表現方法で楽譜のなかの音を、再現ではなく、「表現」できる！　以前は感じられなかった立体感を、楽譜のなかから感じることができる！　楽譜のなかの世界との関わり方に確信をもって、ピアノを弾くこ

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。



とができる！

彼女が感じたこの感覚が、はたして正しかったのかどうか？　彼女自身の思い込みではなかったのか？

結果は、2005年８月、第29回ピティナ・ピアノコンペティション・グランミューズ部門Ａ１カテゴリー全国大会でカプースチン作曲「８つの演奏会用エチュード作品40」を弾き、３度目の優勝を果たすことによって出た。[1)]

23歳の夏、あすかはすでに魅力的な大人の女性に成長していた。そして、もう昔のような演奏会用のイーブニングドレスではなく、洒落た色彩とデザインの原宿風の衣裳とミニスカートに身を包み、本選を勝ち取った。

『第29回ピティナ・ピアノコンペティション結果特集号』に、受賞者本人のコメントが載っている（〈社〉全日本ピアノ指導者協会、2005）。

「JAZZ寄りの選曲をしたものの、久しぶりの“楽譜”と向き合うことにはじめは正直とまどった。2000年にクラシック音楽界を離れてからはステージの機会も“演奏会”ではなく“ライブ”であった。練習中『クラシックの練習の仕方ってどうだっけ』と思い出せず、ライブ前の準備の感覚のまま、『ステージ上の共演者とライブ会場のお客さんとともに楽しむ』ことだけをイメージで追った。しだいに譜面のおたまじゃくしは私を縛るのではなく、自分だけでは思いつかない色々な世界へと連れて行ってくれた。楽しかった。５年間の距離を超高速で埋めるかのように、私は今年の夏をただピアノと過ごした。“出戻り”のわたしにピアノは昔と何も変わらず、鍵盤の上で言葉にならない支離滅裂な私のタッチを１つずつすくいながら『そんな簡単に許してたまるか』と冗談交じりに笑って応える。そのピアノの優しさに真剣に泣けた。

３歳からの15年間に積み上げてきたもの、一度クラシックを離れた先で感じてきた多くのもの、その１つでも欠けたなら、今回の受賞はなかったと思う。今までのどのタイトルよりも、自分にとって意味のあるものとなった」

６歳、17歳のときに続き、23歳で３度目の受賞後、松本あすかの職業人生はとんとん拍子に進んだ。

2007年春、ある音楽事務所と新規契約し、同年秋に銀座で何年ぶりかのピアノ・リサイタルを行った。その際、ロンドン在住のクラシックピアニストの姉も駆けつけ、姉妹によるピアノ２台の連弾曲もプログラムに盛り込まれた。あすかのソロ演目には、得意のカプースチンをはじめ、リストやドビュッシーに加えて、彼女自身がジャズ風に編曲したバッハ、モーツァルト、ベートーベンなどの「定番」も含まれていた。

翌2008年５月、メジャーデビューとなるCDアルバム『PIANO ESPRESSIVO』がキングレコードから発売され、好評を博した。また、同年秋にかけて、打楽器、弦楽器、吹奏楽器奏者との協演を含む全国ツアーを実施し、各地のFM音楽番組にもゲスト出演した。

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

以上が、ピアニスト、松本あすかの変化に富んだ半生の素描である。

次に、彼女のこれまでの人生を3段階に分け、最新ネットワーク理論の観点から、各時期のネットワークの構造特性を比較し、定性的な考察を加える。

4 運の構造をつかむ

まず、考察を進めるにあたって、本稿が依拠するネットワーク理論の理解が欠かせないので、簡単に論じておこう（西口、2007、2009）。

人生の新陳代謝を促す原動力の1つは、個人を取り巻く「近くの」ネットワークと、ふだん意識せず接触も少ない「遠い」ネットワークの間に、情報伝達経路のつなぎ直し（リワイヤリング）によって少数のバイパス（迂回路）を設けることで、どっと流入する「新鮮な情報」である。

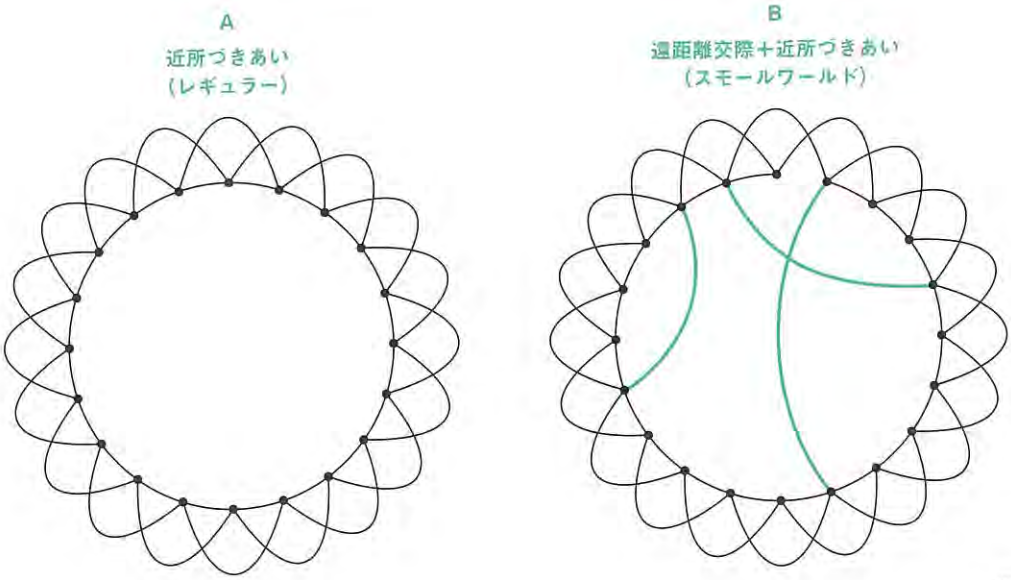
だが、遠くからの情報量が多すぎても、それを受け取る個人と近隣者との関係が疎遠すぎても、情報は活きない。どこかで途絶えてしまう。つまり、遠距離交際と近所づきあいの、絶妙なバランスが大切である（図1のB——点は個人、線はつながりを示す）。

個人や組織がいかに優れていても、情報へのアクセスと処理能力は限られているため、何人も、すべてを知り、万物を所有しコントロールすることはできない。

他方、ごくふつうの個人や組織が、著しく繁栄する場合がある。特に恵まれた環境になく、僥倖も少なく、皆と同じように悩み、挫折し、試行錯誤をくり返しているはずなのに、結果的に、なぜか困難を乗り越え、栄えてしまう。

その秘密は何か。単なる偶然なのか。かりに偶然の助けがあったとしても、その背後に何か法則性のようなも

図1 遠距離交際と近所づきあいのネットワーク



©Nishiguchi 2009

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

のがあるのか。たとえ法則性がわかっても、実際どの程度コントロールできるのか。

最新のネットワーク理論は、こうした問いに新たな展望を示す。つまり、人や組織を取り巻くネットワークのトポロジー（構造上のつながり）が大切で、しかも、それは可変的であり、個人や組織が、固有の認知限界と、資源の制約を超えて繁栄する秘訣は、スモールワールド・ネットワーク化にあるということだ。

いわゆる運のよい人や、成功し続ける組織をよく検討してみると、僥倖ではなく、「運が構造化している」ことがわかる。人や組織の運は、それを取り巻くネットワークのトポロジー、つまり、隣の友人や遠くの知人（ノード、node、結節点）と、ネットワークを通していかにつながっているかという、構造特性に依存する部分が大きい。

重要なのは、個人が直接、誰を知っているかよりも、その誰かがあなたの知らない誰を知っており、その人がさらに、他の誰を知っているかということだ。しかも、五感でとらえられる範囲しかわからない人間固有の認知限界によって、本人たちはそのことに気がつかない。だから、これは運だと錯覚する。

だが、実際に意識しなくても、成功する人や組織は、遠距離交際と近所づきあいの、絶妙なバランスを保ちながら活動している場合が多い。濃密な近所づきあい（高いクラスター係数）を維持しながら、他方では、触手をはるか遠くへ伸ばし、情報伝達経路をつなぎ直して、ふつう結びつかない遠距離のノード（結節点）とも、短い経路でつながっている。そして、そこで得られた冗長性のない情報を、巧みに利用する。

これこそが、近年話題のスモールワールド・ネットワークの魅惑的なメリットであり、遠距離交際と近所づきあいの「いいとこどり」なのだ。

対照的に、失敗し続ける人や組織は、どこかでバランスを崩しており、濃密な近所づきあいに埋もれて、遠距離交際にまったく手が回らないか、逆に遠くのノードとの関係ばかり追い求め、近隣との交際を無視するかの、どちらかに偏る傾向がある。

要するに、ネットワークのトポロジーが悪い。そして、成功者と同じく、失敗者もまた、そのような構造特性に気づかない。

筆者が世界中から発掘した新鮮な事例は、こうした事情を詳述し、スモールワールド・ネットワーク理論の、幅広い妥当性を明らかにした（西口、2007、2009）。そこには、個人であれ組織であれ、迷いから覚め、新たな成功をつかみ取るための、有用なヒントがある。この理論は、人と人のつながり方に関する洞察を深め、日常現象の背後に潜む原理を、見極めるのに役立つ。

こうしたネットワーク理論の観点から、松本あすかの遍歴を考察してみよう。

5 3つの時期のネットワーク図

図２～４のイラストは、これまでの松本あすかのピアニスト人生の３つの時期を示す。

先述の素描でも示唆されるように、ピアニストとしての彼女の人生を、個人としての人生から切り離すのはほぼ不可能なため、本稿の分析では、特に両者を区別しない。なお、各図で中心に位置する自画像は彼女自身の手によって描かれ、また、３つの時期の呼称、「依存期」「自立期」「相互依存期」も本人の命名による。

図２～４の各時期で、あすか自身を取り巻く人的ネットワークを、個人を表す各ノード（図では実線で囲ったサークル）の重要さの程度に応じて、本人に主観的に描いてもらい、閲覧に差し支えないように編集して示してある。

ここでいう「重要さ」とは、個人として、また、ピアニストとしての彼女自身の人生に決定的な影響を与えたという意味合いである。実線で囲った各ノードは個人を

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

表し、その大きさ（面積）は重要さを、中心のあすかとの距離は、接触頻度の高低を示す。

つまり、ノード面積が大きいほど重要な影響を与え、距離が近いほど接触頻度が高い。ノード間の実線は関係を、その本数は関係の強さを示す。また、いくつかのノードを囲う破線は、ひとくくりのコミュニティーを表す。適宜、実線や破線の脇に付された単語は関係や属性を説明する。いずれも、松本あすか本人による主観的な査定の結果を示している。

なお、プライバシーの観点から、個人名は記されていない。また、煩雑になるので、相対的に重要度の低いノードは省略してある。[2)]

では、依存期から見てみよう。

依存期

18歳、高校卒業までの依存期のネットワークは、スカスカである。本人が述懐するように、高校になじめず、不登校がちになり、幼少期からの延長でピアノを続けていたことを除くと、１人で悶々とする日々が多かった。家族とピアノの先生、恋人以外では、友人や知人の数は極端に少なく、しかも、各ノード（個人）から先は、少数の例外を除くと、そこで途絶えており、発展的につながっていない（図２）。

つまり、松本あすかから見ると、彼女を取り巻くネットワークは、それぞれがバラバラのコミュニティーに属する「直接知っている親しい人」だけで構成されており、「１次の隔たり」を超えてさまざまなコミュニティーと「つながる」ことはほとんどなく、乏しい数のコミュニティーも、たがいに「離れ小島」となっている。

高校生という、社会的に未熟な立場だったことを考慮しても、この時期のあすかのネットワーク・トポロジーは著しく限定的だったといえよう。

とはいえ、こうした「見取り図」を表面的に観察するだけではとらえにくい質的に重要な「つながり」、つまり、「2000円のスルメ」の役割を果たしたノードがあるので、指摘しておこう。

ところで、「2000円のスルメ」理論（筆者の命名）とは、東京大学大学院工学系研究科の大澤幸生先生が非公式に語る、次のような状況下の消費行動の誘因理論である（2009年４月23日、一橋大学イノベーション研究センターにおける彼のセミナー「ポスト見える化の工学——チャンス発見から価値センシングへ」から筆者要約；より公式な説明は、大澤、2004、2006を参照）。

たとえば、仕事帰りのサラリーマンが、晩酌用のカップ酒を買いに、自宅近くのスーパーに立ち寄ったとしよう。好きなカップ酒をかごに入れると、たまたまそばに置いてあった2000円の高価なスルメに目がとまり、あっ、そうだ、こんなつまみもぜひ食べたいと思う。

でも、とりあえず今夜は、１本200円程度のカップ酒に比べて値段が高すぎるから、代わりにもっと安い、数百円で買える小さなパック詰めのさきいかのような代替品を、他の陳列棚で探して買って帰り、晩酌のつまみとした。

ところで、このサラリーマンは、2000円のスルメを偶然店頭で見ることによって惹起された消費欲望をよく覚えていた。

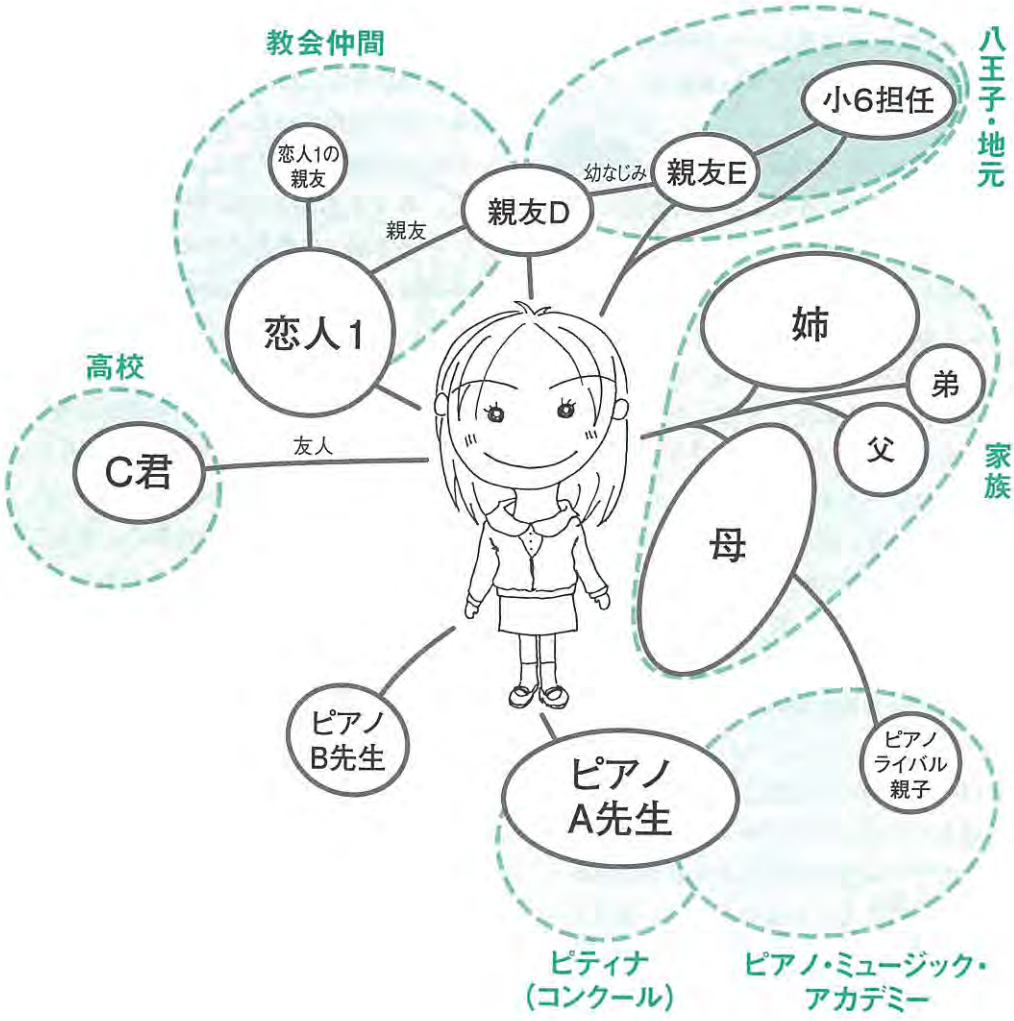
その後、彼はこのスーパーに立ち寄るたびに、好みのカップ酒とともに、必ずパック詰めのさきいかのような、スルメより安価だが、それまでよく安酒とともに買い求めていた100円の極安ピーナッツ袋よりは高価なつまみを購入するようになり、ささやかとはいえ、この店の売り上げ増に貢献した。そして、ときには奮発して、2000円のスルメを買うようにもなった。

こうした状況における消費行動の誘因理論が「2000円のスルメ」理論である。ここには重要な教訓がある。

つまり、POS売り上げデータなどでは必ずしも目立たない「スロームービング・グッズ」（動きの遅い商品）であっても、関連商品のそばに陳列されることによって、それまではまったく気づかれなかった潜在消費欲が

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

図2 依存期



掻き立てられ、かりにその商品自体はすぐ売れなくても、続いて誘発するもっと効果的な消費行動の誘因になる場合があるということだ。

そのため、このような商品（ノード）は、決して店の陳列棚（ネットワーク・トポロジー）から取り除いてはならない。なぜならそれは、有力なリワイヤリングの「誘い水」となりうるからだ。

松本あすか「依存期」のネットワークにおける「2000円のスルメ」は、図左のC君だった。彼は、欧州帰りの帰国子女で、あすかの高1時代の同級生だった。あすかがそうであったように、いや、むしろそれ以上に、C君は新学期から高校の雰囲気になじめず、結局、高1で中

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

退してしまった。

だが、あすか本人の回想によると、たがいにそれほど言葉を交わさなくても、入学当初から高校になじめなかったという共通点もあって、不思議にウマが合い、毎晩のようにかかってくる彼からの電話でつい長話をしてしまったという。

共通の話題は、学校になじめないことからはじまって多岐におよんだが、なかでもあすかにとって新鮮だったのは、それまで、特に両親からもピアノの先生からもあからさまにいわれたことはなかったとはいえ、暗黙的な罪悪感、自己検閲によってみずから関心をもつことを避けていたクラシック以外の音楽、なかでも、C君がはまっていたロック音楽に目を開かれたことだった。

ディープ・パープルや、ボン・ジョヴィ、ヴァン・ヘイレンから最新のユーロビートまで、欧州帰りの16歳の学友は何でもよく知っており、熱心に語り、薦め、聴かせてくれた。単に悪いもの見たさといった次元を超えて、感じやすい年頃のあすかにとって、クラシック音楽にはない荒々しいリズムと原初的な興奮に満ちたロック音楽、その別次元の響きは身体に染み入り、魂を揺り動かした。

そのときは思いもよらなかったが、そのわずか数年後、あすかが抵抗感なく、ロックやジャズの世界に飛び込み、学習し、摂取して、みずからそうした音楽を演奏しはじめたきっかけは、こうして16歳のとき、一見乏しいようにも見えた彼女の人的ネットワークに埋め込まれた「2000円のスルメ」であるC君によって、密かに準備されていたのかもしれない。

自立期

みずから「高校時代は墜ちきれなかったので、本当に墜ちるところまで墜ちたかった」と語る18～23歳の５年間は、煉獄であると同時に、次の飛躍を準備する期間でもあった。

クラシックピアノとの絆をみずから強引に断ち切り、はた目には、なぜ好きこのんで苦難を求めるのか、音楽家として成功する可能性のほとんどない転落の道を歩もうとしているのか、理解できなかったに違いない。

あすか自身も、自暴自棄の果てとしか思えない現実の重みに耐えかねていた。辛かった。高２の夏から続いていた恋人（図２の恋人１）との関係も断ち切られてしまった。みずから望んで入学したはずの専門学校だったが、その雰囲気に慣れるのにも時間がかかった。特にジャズ理論が難しくて、なかなか授業についていけなかった。

こうした事情が重なり、入学後の半年間は、クリスチャンの家庭で育ったせいで幼少期から慣れ親しんでいた聖書に、大人として初めて真剣に向き合い、読みふけり、深い慰めを得た。

やがて、あすかの心情を理解し、悩みごとを辛抱強く聞いてくれる新しい恋人（図３の恋人２）もでき、住む世界が広がった。無数のミュージシャン仲間とも友だちとなり、数多くのセッションで協演し、夜を徹して飲み、騒ぎ、人生や芸術や将来を語り合った。専門学校で習った一流のジャズ奏者や音楽家の先生方も、音楽性に秀でたあすかを可愛がってくれた。

高校ではまわりと共通の話題をもつことの少なかったあすかにとって、こうしたことすべてが新鮮だった。

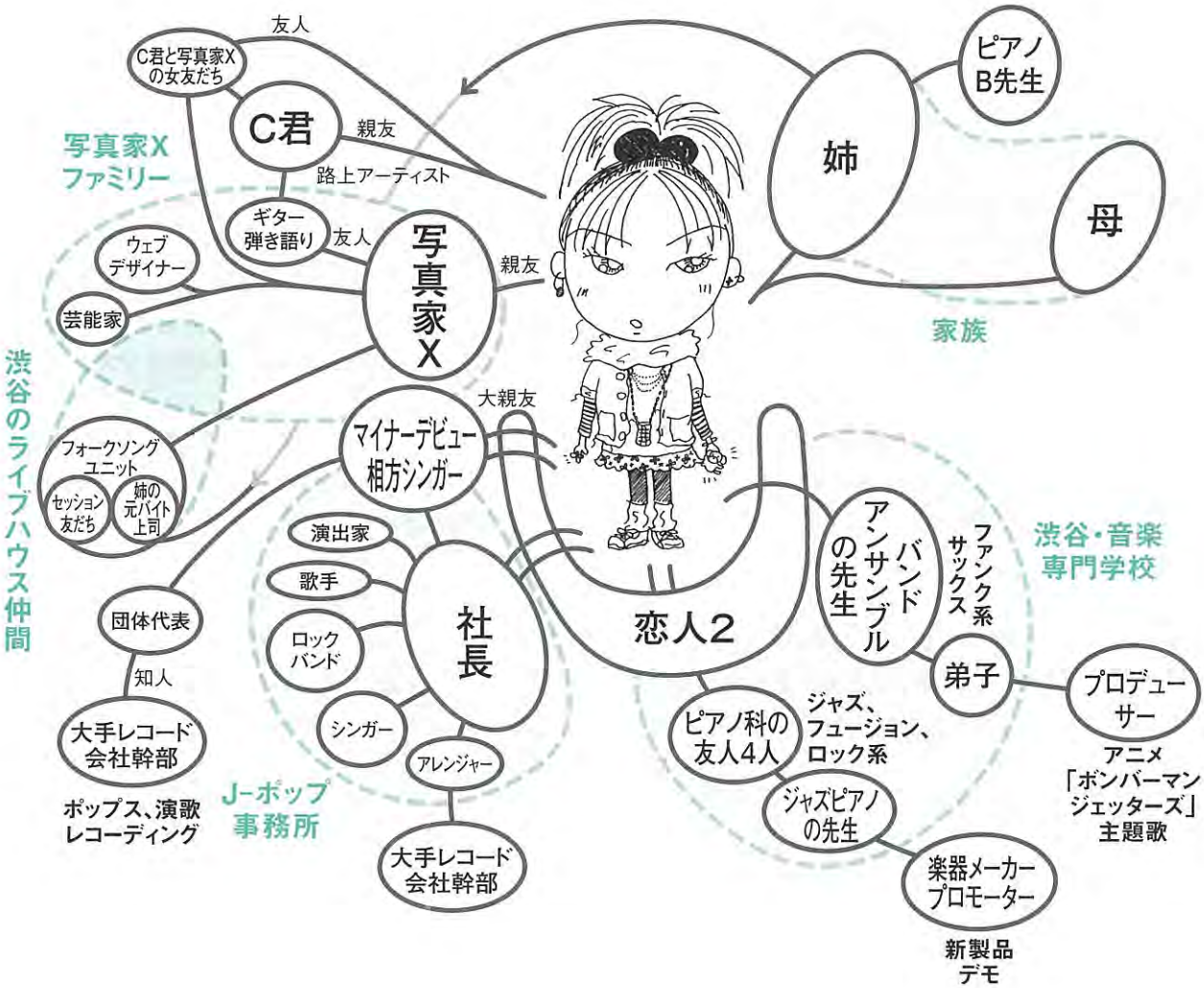
この時期、数年間、親元を離れ、都内で自活した。また、短期間だったが、音大のピアノ科に通う姉との共同生活も体験した。

そうした事情を反映して、図３が示すように、姉を除くと、あすかのネットワークでは、相対的に家族の重要度が減り、専門学校で知り合った友人や先生をきっかけとして、音楽や芸術仲間を中心とするノードが急増した。その結果、彼女のネットワーク・トポロジーも一変した。

ライブハウスや路上で演奏する機会が多くなったこともあって、ロック、ジャズ、ポップス、フォーク、ファ

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

図3 自立期



ンク、フュージョン系の各バンドメンバー、シンガー、アレンジャー、プロデューサー、音響エンジニア、音楽事務所、イベント・プロモーター、レコード会社等との交流が一気に増えた。

また、路上ライブを撮りまくっていた写真家Xの知己を得たことを契機に、そのモデルにもなり、共同で自主制作アートをつくったりもした。

この「自立期」のネットワーク・トポロジーは、次の3つの点で、「依存期」とは一線を画す。

第1は、ノード数が顕著に増えたこと。そのほぼすべてが非クラシック音楽系だった。

第2は、ノード間のつながりである。特に、新規のノ

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

ードを介してコミュニティーどうしの横のつながりが増え、各ノードの先がそこで死んでしまう「離れ小島」や、バート（Burt, 1992）のいう「構造的な溝」、あるいは、一般のネットワーク理論にいう「クリーク」（creek、小川、入り江）が減ったことである。

そのため、第3に、もともとは異なるコミュニティーに属していたノードどうしが「架橋」され、そのことによって、ハブ（中心的な結節点）の位置を占めるあすか自身が意識的に出かけていかなくても、コミュニティー間を自由に情報が飛び交い、放っておいても、スタジオ録音やライブ出演、また、作詞、作曲、編曲、写真のモデルなどの仕事が舞い込むようになった。

また、図3で示されるように、高1でドロップアウトしたC君との交流はこの「自立期」にも続いており、その存在は、かつての高校時代のように単にロック音楽への橋渡し役、解説者としてではなく、今や、同じ路上ミュージシャン仲間として、積極的な役割を担うようになったことは注目に値する。

実際、この時期のあすかは多忙だった。とはいえ、第一線で活躍するミュージシャンの裏方的な仕事が多く、収入は不安定で、実に合う仕事は多くなかった。露骨に搾取されることもあった。

だが、そうした嫌な思いと引き換えに、そうでなければ決して学べなかったような多くのこと、たとえば、極端なショートノーティスで、作詞、作曲、編曲をこなし、ほとんどリハーサルなしで、初対面のミュージシャンと協演し、ぶっつけ本番で音合わせをしながら、プロとして恥ずかしくない音楽を共同で創っていく作業も難なくこなせるようになった。

後日、冷静にコスト・ベネフィット（費用対便益）分析をしてみると、確かに大変な時期だったが、むしろ得たことのほうが多かった。とにかく、労苦と同じくらい、収穫も多大だった。

18歳でクラシックピアノを放擲し、専門学校の初日にアドリブの意味がわからなくて、駅まで泣きながら帰ったあの壮絶な体験の日々が、今、遠い昔のことのように思われた。

相互依存期

図4は、23歳で3度目のピティナ全国大会優勝を飾り、クラシック音楽界に返り咲いて以降、今日にいたるあすかの人的ネットワーク・トポロジーを示す。

全体として、つながりのある個人を示すノードもコミュニティー関係も、いっそう発展していることが一目瞭然である。なかでも特筆すべきは、「自立期」に比べて、異なる専門性のコミュニティー間のバランスがよい点である。

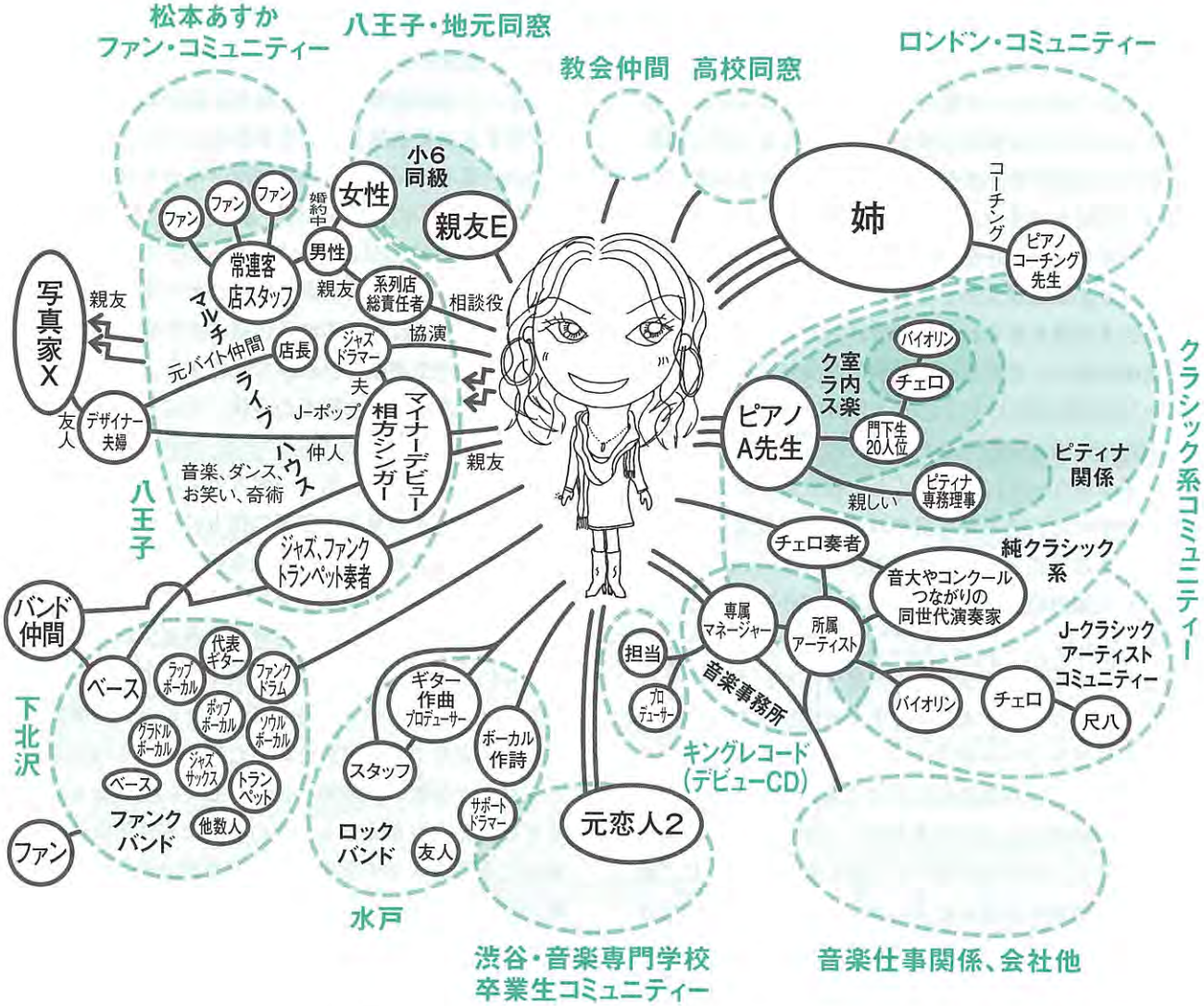
つまり、一方では、「出戻った」ことによって、古巣のA先生の紹介で、世界最大級のクラシックピアノ・コンクール開催団体であるピティナ上層部との公式な関係が生まれ、そのホームページや機関誌への連載執筆や、教育用にクラシックやポップスの名曲を編曲した楽譜出版などを通じて、ピティナの教育・宣伝活動にも積極的に関わりはじめた。

ちなみに、1966年に故福田靖子によってその前身が創設されたピティナ（PTNA、The Piano Teachers' National Association of Japan、社団法人全日本ピアノ指導者協会、名誉会長・羽田孜元首相、会長・出井伸之ソニー元会長）は、1980年代以降の国内のピアノ生産・販売の衰退とは反比例する形で、著しい発展を見せている。現在、2代目の辣腕専務理事、福田成康のもとで、年齢やカテゴリー別に多くのコンクール部門を擁して全国展開し、2008年度にはのべ4万416組のコンクール参加者を誇っている。

話を戻すと、他方では、松本あすか「自立期」にインフォーマルに形成されたクラシック以外のミュージシャン仲間や、関連する幅広い各コミュニティーとの交流は、いっそう発展した形で維持されていることが、図の左上半分からうかがえる。

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

図4 相互依存期



加えて、メジャーCDデビューをしたことによる、音楽事務所や大手レコード会社との正式な契約関係を媒介として、クラシック系オーケストラや音大出身者を中心とする純クラシック系の音楽家グループ、また、J-クラシックと呼ばれるより幅広いアーティストのコミュニティーなど、先述のA先生の人脈と部分的に重なるクラシック系アーティストの豊かなコミュニティーに強くリンクされていることも、図の右半分から明らかである。

さらに、カプースチンの名演で返り咲く前後に、個人的に知り合った数人のキーパーソンを介して、ライブ活動、デザイン、レコーディングなどの領域で緩やかな連携を組むことになった複数のポピュラー系、非クラシッ

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

ク系のコミュニティーも、図左下に出現している。

総じて、依存期のスカスカ状態の図、また、自立期のジャズ、ロック、ポップス系音楽に偏重した図に比べると、この相互依存期のネットワーク・トポロジーは、各分野間でよくバランスが保たれている。クラシックと非クラシック系の直接交流は少ないかもしれないが、図左半分を大きく占める非クラシック系の各コミュニティー間には、適度の連携や「架橋」が認められる。

こうしたトポロジーを観察すると、中心のハブ、あすかにとって、つながりがすぐ利用できるノードは適度に分散し、その数も多く、先々への「通じ具合」もよいことが示唆される。そのため、数学的な実証は難しいとしても、「遠距離交際」と「近所づきあい」の各長所や利便性が適度に組み合わされた、均整のよいスモールワールド・ネットワークに取り囲まれた彼女に「いいとこどり」を許すので、そこから得られる利益の総計はかなりのものであろうことが推測される。

こうした観察結果は、あすか本人の確かな感触とも一致する。

つまり、5年間の「ブランク」によって、もうクラシック一本でもジャズ一本でもひとり立ちできなくなってしまった純クラシックピアノ少女は、過去の存在となった。だが、そこから独創的な形でよみがえった現在の自分が、世界の誰にもまねできない、いや、少なくとも自分よりも鮮烈に弾ける奏者の多くない領域を開拓し、独壇場として確保することによって、こうした新しい自分の活かし方を追究し選択することの正統性を、このトポロジー図は示唆している。

もとより、人と人のつながりからなるネットワークの分析には、何を「関係」と定義づけるかという難題が介在するため、一意的な解釈に基づく分析には、慎重を期するべきである（西口、2007）。さらに、依拠するデータが定性的で、主観的に創出された場合、そのおおざっぱな記述でさえ、資料の内在的な限界を踏まえたうえで、証拠から何を語りうるかについて、慎重なスタンスを維持しなければならない。

そのような意味で、本稿の記述は、はじまりのはじまりにすぎず、松本あすかという個性的な芸術家の魂の遍歴を、主観的に重要と思われる諸人物との結びつきや関係性を、3つの時期に分けて本人に描いてもらった資料と取材をもとに素描したにすぎない。

また、筆者の閲覧に供与された、ハードコピーにして1.2メートル厚に達する（！）膨大な量の非公開手記、日記、小文、さらに、非公開分を含むブログ類や、写真、パンフレット、動画演奏記録などのオリジナルデータの解析をもとに、その波乱に富んだ半生の意味を、最新ネットワーク理論の枠組みで見直すと、いかなる眺望が得られるかといった観点から探ったにすぎず、探索的な試みの域を出ない。

だが、少なくとも、ある一個人の立場で見た、その人的ネットワークの見方と利用の仕方について、定性的なヒントを示すことによって、従来のシミュレーションによる数理モデルの知見を補完し、より豊かな研究の可能性を指し示すことができたと考えられる。

さらに、これまで、グループ間や組織間関係の目の粗い分析や、共著者や共同特許出願者といった比較的入手しやすい定量データ解析といった領域に限られてきたネットワーク分析の伝統的手法に対して、ラフなものであるとはいえ、少なくとも先述のような定性的なヒントを導出しうるスケッチを描き、被験者自身が蓄積した原資料の読み込みと、多数回の長時間インタビューから得られた証拠によって、そのストーリーの意味を探る試みのなかから、一定の洞察が得られたといえよう。

6 楽譜は語る

最後に、ピアニスト、松本あすかの魂の遍歴を効果的に要約する、シンボリックな図を示して、本稿を終えよ

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

う。

図５は、彼女のアーカイブのなかから、先の「依存期」「自立期」「相互依存期」の各時期に使用された典型的な楽譜の一部を拡大して、比較したものである。

図左３～18歳の「依存期」の楽譜には、多くの書き込みがある。ここに示されていないものを含めると、総じて「～しちゃダメ」「右きいて」「音きいて」「～するな」といった強い「禁止・命令語句」で溢れている。「楽譜のなかの服従」が強制され、自由に息つく空間は多くなさそうである。

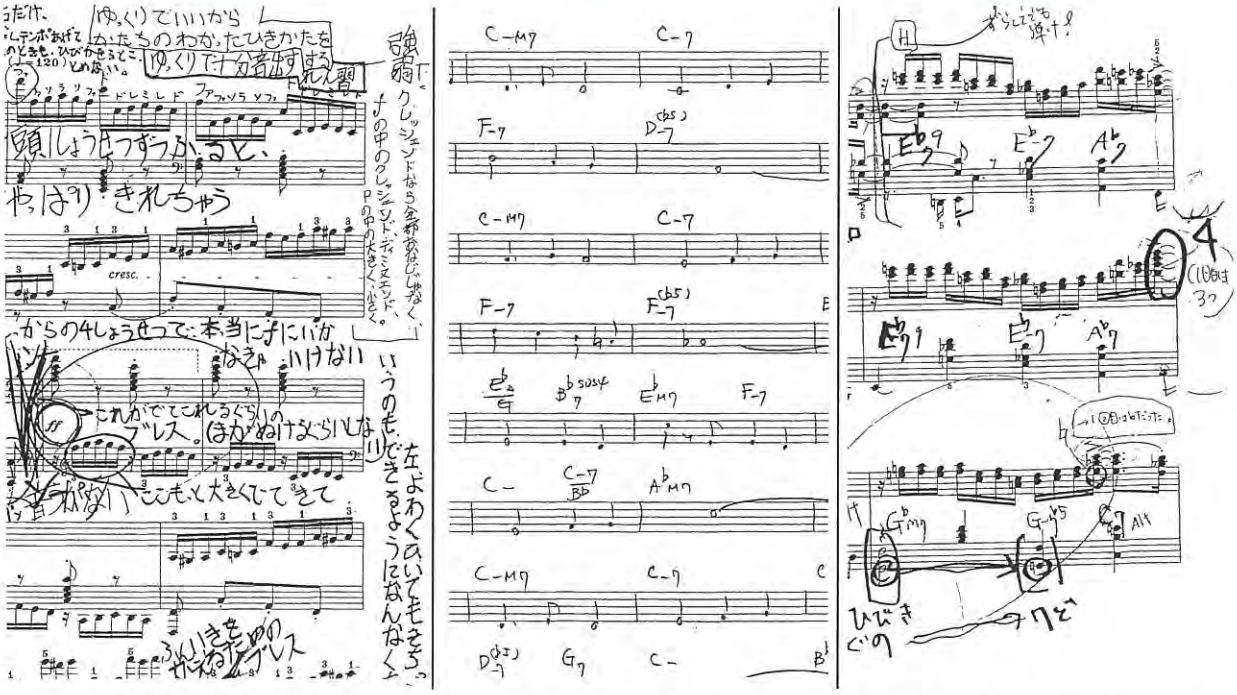
対照的に、図中央18～23歳の「自立期」の楽譜は、スカスカでほとんど音符さえなく、代わりに、五線のすぐ上にコード名が記されている。

コードとは、多数の音符や調の組み合わせからなる楽譜マネジメントにおいて、「複雑性の縮減」（西口、2007、2009）を効果的に行う一揃えの単純化された記号群である。コードは、個別のメロディーや音の組み合わせではなく、定型化された和音のセットを１つの単位として扱い、各単位に呼応する鍵盤楽器や弦楽器の「押さえどころ」を示す。

そのため、コードさえ知っていれば、音符を読めなくても、つまり、楽譜がなくても、立派に音楽することができる。1990年代に日本のポップス界を席巻した小室哲哉も、楽譜が読めず、キーボードでコードを押さえなが

図５　３つの時期の楽譜

依存期（正）　自立期（反）　相互依存期（合）



ツェルニー 40番練習曲「第40番」より

リチャード・ロジャース／ロレンツ・ハート「マイ・ファニー・バレンタイン」より

ニコライ・カプースチン「８つの演奏会用エチュード作品40」第７番「間奏曲」より

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

ら作曲するという。

図右23歳以降の「相互依存期」の楽譜は、「依存期」と「自立期」のいいとこどりであり、バランスのよい混淆が見られる。禁止語句は消え去り、押さえどころにわずかな記述があるだけである。そして、要所要所に適宜コード名が振られ、曲の進行がつかみやすい。松本あすかによると、コードを書き込むと、暗譜が著しく楽になるという。「複雑性の縮減」の強みである。

こうして、松本あすかの「依存期」「自立期」「相互依存期」のループは一巡する。「正→反→合」の弁証法的な展開が一段落したともいえる。

だが、変転に終わりはない。彼女のネットワーク図は生き物であり、日々変化している。しかも、常によりよい方向へとは限らない。ネットワーク上のトポロジカルな優位は、瞬時に崩れる場合もある。

そうしたとき、闇雲にあがくのでなく、本稿で論じた最新ネットワーク理論の知識を活用しながら、態勢を立て直す必要も出てこよう。

日々変転する状況をリアルタイムで把握し、その構造上の欠陥を察知し、手遅れにならないうちに手を打てばよい。さもないと、こっぴどくやられてしまう。他人によってというよりも、自分を取り巻くネットワークのトポロジー上の欠陥に、やられてしまうのだ。読み違えは禁物である。

あるとき自分に最も有利に働いてくれた個人が、周囲のネットワーク構造が一変したために、脅威に転じる場合もある。

戦国時代の武将間の抗争や、国際紛争における諸国間の駆け引きを思い起こせばよい。ある1つの決定的な要素がなくなり、その周辺のつながり方が根本的に変わってしまうと、昨日の友が今日の敵となる。その逆も起こりうる。

つまり、個人の属性というよりも、ネットワーク・トポロジーの変化がそうさせるのだ。だから、過去の成功の記憶や思い出に過度に頼ってはいけない。

松本あすかを取り巻くネットワーク構造も次々に変化している。たとえば、2009年春に所属事務所が変わり、新しい環境で2枚目のアルバムのレコーディングを行った。また、コンサートについても、これまでとは違った聴衆とのつながりを模索しているという。

だが、より重要なことは、所属事務所の変更によって、彼女の人的ネットワークの一部も変更を余儀なくされ、もはや図4は過去のものとなりつつあるという点だ。こうした最新状況は、「相互依存期」に急拡大した人的ネットワークの接触範囲に一種の「飽和感」を抱きはじめていたあすかに、新しい1つの課題を与えている。

ピアニストとしての忙しさが増すなか、芸術活動そのものに集中できる時間と、そうした人的ネットワークのマネジメントに振り分ける時間を、相互の侵食なしにこなすことは難しい。

だが、まもなく28歳を迎えるプロの音楽家として、贅沢はいっていられない。18歳で家出したときとは、環境がまったく異なるのだ。そうした意味でも、本稿が論じた一個人の視点から見るネットワークの眺望とその解釈が、彼女ばかりでなく、幅広い読者の関心を呼び、各位の個人ネットワークの特性を把握し、よりよい人生を生き抜くための一助となれば幸いである。[3] H

西口敏宏（にしぐち・としひろ）
1952年兵庫県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。ロンドン大学社会学修士（M.Sc.）、オックスフォード大学社会学博士（D.Phil.）、MIT（マサチューセッツ工科大学）研究員、INSEAD（インシアード）研究員、ペンシルベニア大学ウォートン・スクール助教授を経て現職。専門は組織間関係論、ネットワーク論。経済産業省、防衛省等委員を歴任。2003年防衛庁より表彰。ケンブリッジ大学、メリーランド大学、MIT上級客員研究員。国際ビジネス研究学会理事。防衛調達基盤整備協会理事。財務省財務総合政策研究所特別研究官。主な著作：『ネットワーク思考のすすめ』（東洋経済新報社）、『遠距離交際と近所づきあい』（NTT出版）、『中小企業ネットワーク』（編著、有斐閣）、『戦略的アウトソーシングの進化』（東京大学出版会）、*Managing Product Development*（Oxford University Press、米国シンゴウ製造業研究優秀賞）、*Strategic Industrial Sourcing*（Oxford University Press、米国シンゴウ製造業研究優秀賞、米国『チョイス』誌最優秀学術書賞、日経・経済図書文化賞）。

西口敏宏 (2009)「『松本あすかという作品』ネットワーク論で見るある芸術家の魂の遍歴」『一橋ビジネスレビュー』57(2) : pp. 6-23
*出版社の許諾を得て公開しております。

注

1　当時の松本あすか自身の手記には、カプースチンの難曲を、誰よりもうまく、流れるように、グルーヴ感をもって弾けることについての、率直な喜びの記述がある。

ちなみに、「８つの演奏会用エチュード作品40」をカプースチン本人とあすかの演奏で聴き比べると、両者の解釈の違いが際立つ。

誇張を恐れずに表現すれば、前者は、ソ連製のT34戦車隊が、モスクワのノーヴィ・アルバート通りやサンクトペテルブルクのネフスキー大通りを、轟音とともに行軍するような印象であり、後者は、真っ赤なフェラーリが、ドイツのアウトバーンを、美しく、典雅に、疾走するような感興を与える。いずれも傑出している。

2　紙幅と時間の都合上、本稿のネットワーク分析は、その概要をスケッチ的に示すにとどめる。また、各期間中、任意のノード（個人）が不断にあすかに一定の影響を与え続けたのではなく、その間に、影響度や接触頻度に粗密があったことはいうまでもない。図２～４は、あくまで各期の主観的な平均を示す。

なお、本人に影響を与えたと考えられる個人の総数は、現時点で把握されているだけで300人を超え、各位の時期別（１年単位）の詳細や属性、影響度、接触頻度等に関するデータも集まりはじめているが、その集計と定量分析は後日に期す。

3　本稿の執筆にあたっては、2008年４月から09年７月にかけて、松本あすかさん本人だけでなく、ご両親、姉、専属マネージャー、A先生、ピティナ上層部の方々との、度重なる取材インタビューによって、貴重な情報を収集させていただいた。ここに改めて各位に謝意を述べたい。なお、本稿における解釈、記述の誤りや事実誤認等の責任は、筆者のみに存する。

また、本文で触れたように、あすかさん個人の膨大なアーカイブのなかから、筆者の研究閲覧用に供与された、さまざまな形式のオリジナルデータを参照した。幼少期から今日にいたる豊かな活動歴や心境が記録されたデータの総量は莫大で、ハードコピーで1.2メートル厚に達したが、本稿の執筆に先立って、そのすべてに目を通し、付箋をつけ、多くのメモをとり、周到な準備を重ねた。

本文で言及したように、３つの時期におけるネットワークの各ノードの属性に関する詳細なデータも集計されつつあるので、今後さらに周到な準備を経て、より広範な考察や定量分析を含む研究成果に結びつけられれば、いっそう豊かな知見と洞察が得られるであろう。

関心ある読者は、乞うご期待である。

参考文献

Burt, Ronald S.
1992. *Structural Holes: The Social Structure of Competition*. Cambridge, MA and London: Harvard University Press.

西口敏宏
2007.『遠距離交際と近所づきあい――成功する組織ネットワーク戦略』NTT出版.
2009.『ネットワーク思考のすすめ――ネットセントリック時代の組織戦略』東洋経済新報社.

大澤幸生
2004.『ビジネスチャンス発見の技術』岩波アクティブ新書.
2006.『チャンス発見のデータ分析――モデル化＋可視化＋コミュニケーション→シナリオ創発』東京電機大学出版局.

（社）全日本ピアノ指導者協会（ピティナ，PTNA）
2005.『第29回ピティナ・ピアノコンペティション結果特集号――全国決勝大会・地区本選・地区予選・ピティナ夏季ピアノ演奏検定』（社）全日本ピアノ指導者協会.